

溝上 慎一の教育論(動画チャンネル) Number 7

※動画で用いるスライドはPDFで動画下にリンクで貼り付けています

③井上義和先生との対談 — アクティブ・ラーニングの効果について(前編) —

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 学長・教授

<http://smizok.net/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

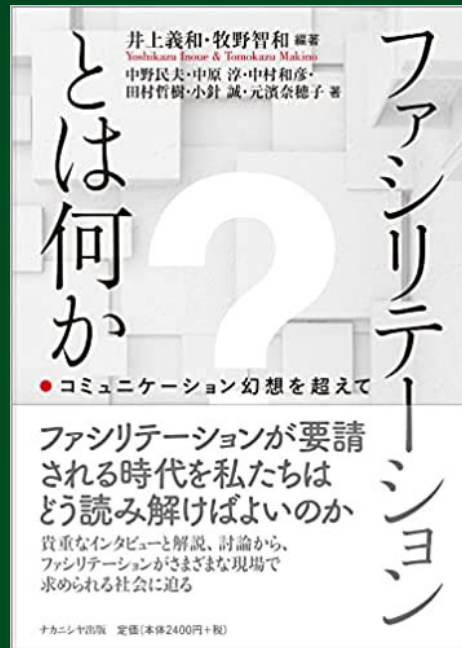
【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、2000年講師、2003年准教授、2014年教授を経て、2019年4月より現在に至る。京都大学博士(教育学)。

*詳しくはスライド最後をご覧ください



※本動画は溝上が個人的に作成・提供するものです





井上義和 (編)

『ファシリテーションとは何かーコミュニケーション幻想を超えて』ナカニシヤ出版
(2021年12月刊行)

> 第7章 小針誠×井上義和 対談
新著『アクティブラーニング』のその後を語る

① 国策としてのアクティブ・ラーニングへの批判

➡ ②アクティブ・ラーニングの効果について



それではご覧ください

②アクティブラーニングの効果について ——本書155頁以下について(1)

- 大学からでは遅い!?

溝上慎一 (2018) 『大学生白書2018』
11~12頁をもとに井上が作図

[高2時点の資質・能力]

(他者理解力/計画実行力/**コミュニケーション・リーダーシップ力**/社会文化探究心)

[**大1時点の主体的な学習態度**]

(単位修得に関係なく学習する姿勢)

[大1時点の資質・能力]

[大1時点の学習]

(成績/授業外学習時間/**アクティブラーニング外化**)

〔この力は〕4つの資質・能力のなかで高校生から大学生への影響力が最も大きい…変わりにくい次元だということである。…しかし、**中学高校の段階でこれらの力を育てられなければ、大学に入学して以降もそれらの能力は弱いままである確率が高く…**(溝上2018、12頁)

②アクティブラーニングの効果について ——本書155頁以下について(2)

- 【論点5】 高校時代の資質・能力（コミュニケーション・リーダーシップ力）は、学校教育（とくにAL型の教育活動）を通じて高まるのか？ 学校教育以前の要素（家庭など環境要因や本人の性格や特性）に大きく左右されるのではないか？
 - 家庭環境に恵まれ、自己主張が得意な生徒ほど、学校で模範的とみなされる「コミュニケーション・リーダーシップ力」を発揮しやすい。授業を通じた獲得よりも、授業外の環境的・性格的要因が大きいのでは。（162頁）

[家庭など環境要因]



[本人の性格や特性]



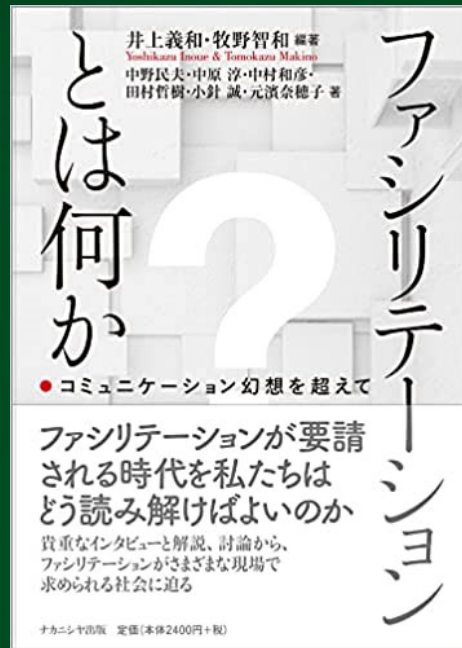
[コミュニケーション・リーダーシップ力]

[学校教育での活動]



②アクティブラーニングの効果について ——本書155頁以下について(3)

- 【論点6】 高校→大学のパネル調査から、大学進学層（相対的に家庭環境が恵まれた層）のことはわかったとしても、同年代人口の半分を占める非進学層（相対的に家庭環境が恵まれない層）はどうか。政策（学習指導要領）は高校教育全体を対象にしている。
 - 児童・生徒の文化的社会的背景は多様化している。全国一律に特定の視点や方法をやらせるのは「よい政策」とはいえないのでは。
 - 個々の教室における「よい実践」の選択肢の一つとしてはアリだが…
 - ↓
 - 【論点2】 「善い実践」は「良い政策」を保証しない
 - 【論点3】 政策がもたらす副作用の手当は必要
 - 【論点4】 「よい教育」のために異分野間の建設的関係を



井上義和 (編)

『ファシリテーションとは何かーコミュニケーション幻想を超えて』ナカニシヤ出版
(2021年12月刊行)

＞第7章 小針誠×井上義和 対談
新著『アクティブラーニング』のその後を語る

① 国策としてのアクティブ・ラーニングへの
批判

➡ ②アクティブ・ラーニングの効果について



ご視聴有難うございました

—To be continued—

チャンネル登録をお願いします

質問、コメントは個人メールで受け付けます。

E-mail mizokami@toin.ac.jp

- お名前、ご所属

※可能なら専門分野や教科、職位なども教えてください、回答の助けになります。
なお、動画内では個人のお名前等は出しません。

- 質問、コメント等



学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 学長・教授

1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、2000年講師、2003年京都大学准教授、2014年教授を経て、2018年9月に学校法人桐蔭学園へ。2019年同理事長、2020年より現職。京都大学博士（教育学）

日本青年心理学会理事、大学教育学会理事、“*Journal of Adolescence*” Editorial Board委員、文部科学省高等教育局スキームD（座長）、中央教育審議会初等中等教育局臨時委員、総合教育政策局リカレント教育審査委員、大学・高校の外部評価・指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、青年・発達心理学・教育実践研究（自己・アイデンティティ形成、自己の分権化、学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジション、人生100年時代のキャリア形成など）。著書に『自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる』（2008世界思想社、単著）、『現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ』（2010有斐閣選書、単著）、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（2014東信堂、単著）、『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』（2018東信堂、単著）、『学習とパーソナリティ—「あの子はおとなしいけど成績はいいんですよね！」をどう見るか—』（2018東信堂、単著）、『高大接続の本質—「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題—』（2018学事出版、編著）など多数。

<http://smizok.net/>



著作紹介

溝上慎一 (2020). 『社会に生きる個性—自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー—』
(学びと成長の講話シリーズ3) 東信堂

第1章 自己と他者の観点から見る学びと成長

1. 人の発達において他者理解は自己理解に先立つ
3. 自己とは——他者との対峙を通して発現する一個存在
6. 講義—辺倒の授業における学習においてさえ他者は組み込まれている
7. 学習プロセスに他者を組み込む——ペア・グループワークはなぜ求められるのか
9. リフレクション（振り返り）はメタ認知を働かせた言語活動
10. 自己内対話と学習

第3章 エージェンシー

1. OECDの学習者のエージェンシー
3. バンドューラのエージェンシー論—四つの特徴
5. 自己肯定感を高めるのではなく、自己効力感（エージェンシー）を高めよ
6. 内発的動機づけ・自己決定理論——主体的な学習の第I～II層
7. 記憶の情報処理から見た学習—自己関連づけ・自己生成

第4章 教育雑考

2. 自分が生徒の時にはアクティブラーニングをしてこなかった。なぜ今の生徒にここまで求めるのか
3. 社会に生きる個性を育てる——教授パラダイムと学習パラダイムに関連づけて
4. 生徒はアクティブラーニングを熱心におこなうが、教師は成果としての手応えを感じない。そこで起こっていることは？
5. アクティブラーニングと評価

